

胎内記憶 人生は自分で選んでくる



text by 稲澤麻弓 +photographs by Yocco

「胎内記憶」とは

「胎内記憶」とは、お母さんのお腹の中に居たときの記憶です。私が初めて「胎内記憶」というものに遭遇したのは、ある小学校一年生の作文を読んだときでした。それはこのような内容です。「僕は変なことが頭の中にあります。僕がお母さんのお腹に居るとき、包丁が刺さってきて、白い服を着て眼鏡の人に足を掴まれて、口にゴムを通してきて、苦しかったので泣いていました。お母さんに聞いたら、『夢でしょう?』と言っています。僕は違うと思います。この「ゴムを通して苦しかった」と言っている部分は、羊水を吸い込んでしまった赤ちゃんに対して、苦しきようにと医者が善意で行う行為を指しています。しかしそれが苦しかったと言っているのです。私はこれを見て、子どもに「なんて酷いことをしてしまったのだろう」と思い、この次のお産から吸引を止めました。

子どもが「胎内記憶」を語る時期は二〜四歳。お風呂に入っているときや寝入るときなど、子どもが気持ちの良い状態のときに思い出します。お母さんが「お腹の中はどうだったの?」と穏やかに聞くと「泳いでいた」「寝ていた」「気持ちよかった」「暗

かった」などと語ってくれます。だいたい三〜四歳で「胎内記憶」を失くしていくというのが常識的だったのですが、小学生でも十%、中学高校生では二〜五%、大人になっても一%は「胎内記憶」を持っている人がいるようです。

赤ちゃんを信じる

赤ちゃんから見たお母さんの人気度というものがあります。第一位は「やさし」「そう」なお母さん。この『そう』というのがポイントで、実は、産まれて来た子どもたちは、「やさしそうなお母さん・お父さんを選んだはずなのに外れちゃった」とよく言います。「お母さん怒ってばかり。そんなんじやお空に帰っちゃうから」と言う小学生も居るのです。その後は、今までは腹が立って怒っていたのが、「ああ、この子が産まれて来てくれて嬉しい」と思っているから怒るようになったそうです。ここが大事なのです。怒ってはいけいけいではなく、怒っても良いのですが、その子の存在を認めてあげるといいうことが必要なのです。会社でも同様です。日本人の悪いところは、仕事で失敗して怒られると「お前の存在自体が悪いんだ」と言われたように聞こえてしまう

ことです。なぜ日本人はそうなのか。やはり産まれたときからずっと尊重されていないからです。尊重されず怒られ続けて来た子どもは傷ついて育ち、自分に子どもができたときに同じように怒って子どもを傷つけてしまいます。この悪い連鎖を止めるには努力が必要です。「あなたの存在は私達にとっても大事なことでよ、でもこれはいけないよね」と、その人の存在を認めた上で怒ってあげるのであります。お腹の中の赤ちゃんがお母さんにして欲しいことがあります。「話しかけて欲しい」「歓迎して迎えて欲しい」「お腹をなでて、自分を感じて欲しい」、そして「自分を信じて欲しい」と思っています。妊娠三十一週目で私のところに来て、お腹が張るのでお腹の張り止めをくださいというお母さんが居ました。そこで、子宮の収縮を抑制する薬を出しました。そのとき、待合室でそのお母さんの隣に居た人が、お腹の中の赤ちゃんと話せる人だったので。そして「お腹の赤ちゃんと話せる人だったので。そして嫌になっちゃった」と言ったそうなのです。「ずつと嫌だと言っているのに、この人分かってくれないから、もう出ようと思つて。お腹張っているのに、薬で止めちゃうんだよ。その薬を飲まれると、お腹の張りは止まるけど私の呼吸も止まるから苦しいんだ。あなた私の声聞こえるでしょ。この人に言つてやっつてよ」と、その赤ちゃんの声が聞こえた人が診察室に入ってくるなり私に言うのです。お母さんには「なるべく薬はやめたほうがいいですよ」と言いました。不思議だったのは、このお母さんにはお腹が張る心当たり（心の冷え、体の冷え、動きすぎ）が全く無かったことです。そこで赤ちゃんが言っていたのは「妊娠したときから私の事を信じてくれな

い」ということなのです。妊娠したとき「流産するんじゃないか」とずつと思つてた。流産する時期を過ぎたら、今度は「早産するんじゃないか」と思つてた。お腹の中で赤ちゃんはずつとお母さんに「信じて」と言い続けたのに「ちつともこの人は分かってくれない。だからもういい加減うんざりしたから出て行く」とお腹の中の赤ちゃんが言っているのです。みなさんが親に自分のことを信じて欲しいか、つたように、これから産まれて来る赤ちゃんを信じてあげましょう。

人生は自分で選んでいる

みんな今の人生を選んで産まれて来たのです。それが良いとか悪いとかはなく、いろんなお父さんお母さんが居て、この人が良いなと思つて選んだのです。流産や死産も、赤ちゃんがこれで良いと思つて選んだ道です。言い換えれば、人生は自分で選ぶ物語です。そして自分の人生の主人公になるのですが、自分で選んで来た事を忘れてしまいます。とても楽しそうな物語を自分で選んだのに、それを忘れてしまつて「なんで私はこんな辛い生活をしないでいいけないんだ」などと思つてしまふ。しかし、ほとんどの人の物語は、結末はハッピーエンドなのです。それを選んでいるはずなのです。だからそれを知つていれば、この辛い時期は必ず乗り越えられるものだとなります。困難の最中は本当に大変ですが、それが無いと自分が成長できないのです。魂の成長のためにも、自分の人生をハッピーエンドで終えるためにも、日々一生懸命生きていってください。

みなさんが親に自分のことを信じて欲しかったように、これから産まれて来る赤ちゃんを信じてあげましょう。



池川 明 Akira Ikegawa
(池川クリニック 院長)

1954年、東京都生まれ。
帝京大学医学部大学院卒業。医学博士。
上尾(あけお)中央総合病院産婦人科部長を経て、
1989年に池川クリニックを開設。



しがくセミナーDVDシリーズ23

「池川クリニック 院長 池川 明」
収録時間 103分/本体価格 3,980円(税込)
お問い合わせ
(株)キャリアコンサルティング DVD販売担当
TEL : 03-5214-6380
URL : <http://www.c-consul.co.jp/dvdbook/>